

イスラエル 考古学研究会

ニュースレター

No. 8

2009年10月

エン・ゲヴ発掘 報告書刊行

1990年から2004年までの間に8シーズンにわたって行われたエン・ゲヴ遺跡発掘調査の報告書がこの3月、LITHON社から刊行された。『エンゲヴ遺跡 発掘調査報告 1998-2004』というタイトルが示すとおり、全8シーズンのうち、最後の5シーズンの報告を中心としている。発掘終結から4年半での刊行は迅速な報告書の発表が前にもまして強く求められるようになっている昨今の情勢の中、十分にその責務を果たしたものと言えるだろう。なお、最初の3シーズンについてはテルアヴィヴ大学考古学研究所から英文で刊行されることが決まっている。

報告書は「報告編」と「考察編」からなる。以下に目次を挙げておこう。

〔報告編〕

I エン・ゲヴ遺跡について（月本昭男・長谷川

修一）

II 鉄器時代

1 鉄器時代の遺構

- i 防御施設（桑原久男）
- ii 下層列柱式建物（日野宏）
- iii 上層列柱式建物（山内紀嗣）

2 鉄器時代の出土遺物

- i 鉄器時代の土器（杉本智俊）
- ii 鉄器時代の青銅製品・石製品・土製品（小野塚拓造）

III ペルシア時代

1 ペルシア時代の遺構（山内）

2 ペルシア時代の土器（牧野久実）

IV ヘレニズム時代

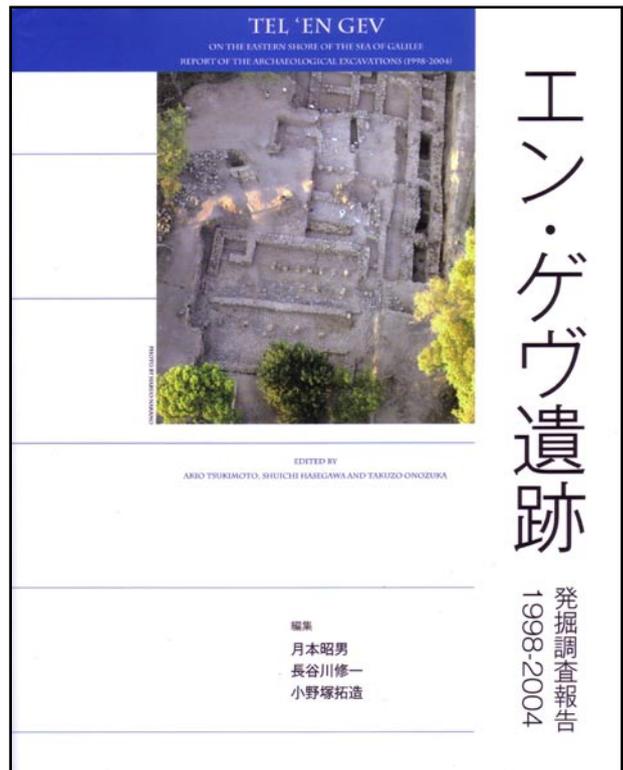
1 ヘレニズム時代の遺構（山内）

2 ヘレニズム時代の土器（牧野）

3 ヘレニズム時代のエン・ゲヴ——考察（牧野）

V ローマ時代

1 ローマ時代の石灰窯について（日野）



〔考察編〕

- 1 アフェク(列王記上 20 章、下 13 章)とエン・ゲヴの同定(長谷川)
- 2 ゲシュル地方と新ヒッタイト文化(杉本)
- 3 ガリラヤ湖(キンネレト湖)を中心とする漁撈活動の歴史的展開(平川敬治)
- 4 生活用具に見るエン・ゲヴ遺跡の石製品と土製品(平川)
- 5 熱ルミネッセンス法を用いたエン・ゲヴ遺跡におけるケースメート式城壁の年代測定(小林由弥・長友恒人)
- 6 熱ルミネッセンス法を用いたエン・ゲヴ遺跡における石灰窯の年代測定(小林・長友)

この5シーズンの間に発掘に参加したヴォランティアは120名にのぼり、その名前がすべて巻末に記されている。編集責任を負った月本教授(調査団団長)からは「発掘調査に参加したヴォランティアの方には特価5000円にてお頒けいたします。希望者は月本までご連絡ください。限定20部です」とのメッセージをいただいた(割引購入希望は本ニュースレターの編集でも承ります)。

今後は英語での報告書作成が続けられ、最初の3シーズンの分と共に日本の発掘調査団による研究の成果が世界に向けて発信されることになる。なお、エンゲヴ遺跡については、慶応大学の杉本教授による追加発掘も進められている。(Mi)



【「パブリック考古学」への視線】

M・ピッチリッロ氏のこと(1)

岡田真弓

「発掘とは破壊である」——かつてある著名な考古学者が言いました。発掘は埋もれた過去を現代に蘇らせる作業であると同時に、慣れ親しんでいた風景を変えてしまう可能性も含んでいます。出土した遺物、遺構の保存、活用といった視点は新しいものではありませんが、発掘の成果というより、発掘という作業過程そのものが現代にもたらす現象を探索する分野として「パブリック考古学」は浸透し始めているようです。今回から数回にわたってヨルダンでのフランシスコ会による発掘後の遺跡と周辺社会との関わりについて紹介していただきます。「考古学と現代」について考えるきっかけになれば幸いです——編集担当

2008年10月26日、イタリア中西部リヴォルノで一人のフランシスコ会の修道士がこの世を去った。彼の名前はミケーレ・ピッチリッロ(Michele, Piccirillo)。享年64歳。

フランシスコ修道会のホームページに設けられた氏へのメッセージを書き込む掲示板には、教会関係者だけでなく、アメリカ近東研究所(ACOR)の研究員、エルサレム博物館の研究員、イスラエル及びヨルダンの大学機関などの当地域の考古学研

究機関や研究者から彼の死を悼むメッセージが寄せられている。(http://htmlgear.tripod.com/guest/control.guest?u=skenuqua&i=3&a=view)

彼はフランシスコ修道会の神父であると同時に中東地域の考古学者でもあった。特にアラビア半島のキリスト教教会堂遺跡に残るモザイク研究を精力的に行い、その保存・修復に尽力した。主要著書には *The Mosaics of Jordan*(1993), *Umm al-Rasas Mayfaah I: Gli scavi del complesso di Santo Stefano* (1994); *Mount*

Nebo: New Archaeological Excavation 1967-1997(1998), *Arabie Chretienne: Archeologie et histoire* (2002) などがある。ヨルダンのネボ山にあるフランシスコ修道会考古学研究所の所長を務め、モーゼ記念教会堂やマダバの教会堂モザイクなどの保存・修復を行う施設を整えた。ネボ山の研究所にはヨルダン王国国王夫妻、前ローマカトリック教皇ヨハネ・パウロ二世、前アメリカ合衆国大統領夫妻など数多くの要人が訪れている。

筆者は修士論文でイスラエルにおけるキリスト教教会堂遺跡の保存と公開の実態をテーマとして、国立公園内とフランシスコ修道会宗教施設内にある教会堂遺跡を取り扱った。それがきっかけとなり、様々な方の協力のお陰で、一度だけピッチリッコ氏にお会いすることができた。今回はその時のインタビューの内容を踏まえて、フランシスコ修道会が当地域のキリスト教考古学での活動をご紹介したいと思う。インタビューは2007年の8月18日にネボ山にあるフランシスコ修道会考古学研究所で行われた。飛び込みの申し込みであったにもかかわらず、丁寧に質問に答え、研究所を案内してくれた氏のご厚意には感謝しきれない。

ミケーレ・ピッチリッコ氏は1944年にイタリアのカセルタ地方に生まれる。ローマ教皇庁聖書研究所において聖書学、組織神学の研究をはじめ、ラサピエンサ大学で中近東考古学を学ぶ。1974年からエルサレ



ミケーレ・ピッチリッコ氏

ムにあるフランシスコ修道会聖書研究所の博物館の館長を務める傍ら、同研究所の聖書地理学と歴史学の常勤教授として教

鞭に立った。1976年からはネボ山をはじめとするヨルダンの発掘調査および修復事業の指揮を執る。

まず最初にフランシスコ修道会の考古学調査活動の歴史についてご紹介したい。1924年、フランシスコ修道会聖書研究所は「初期キリスト教教会堂と新約聖書に記されている聖地を同定する」ことを目的として設立された。それまでパレスチナ地域に学術研究所はなかったが、1901年にフランシスコ修道会管理局 (Franciscan Custody of the Holy Land) がエルサレムに研究センター建設を計画していた。この案を受け、ローマ教皇庁アントニウム大学の聖書考古学部が土台となって、23年後フランシスコ修道会聖書研究所の開設へと至った。1973年にはネボ山に考古学研究所を設立し、ヨルダンにあるキリスト教に関連する遺跡の発掘が行われるようになった。パレスチナ地域の考古学調査をし、研究所の基礎を作ってきた考古学者は次の6人である。聖地パレスチナ考古学の統括をしていたオルファリ神父 (Gaudentius Orfali)、ネボ山やベサニーを発掘調査したサレル神父 (Sylvester Saller)、ナザレやネボ山を調査したバガッティ神父 (Bellarmino Bagatti)、聖墳墓教会、ヘロディオ遺跡、カペルナウム遺跡を発掘したコルボ神父 (Virgilio Corbo)、現在のS B Fの所長であるロフリーダ神父 (Stanislao Loffreda)、そしてフランシスコ修道会考古学研究所の所長であるピッチリッコ神父である (同研究所の現所長はパッパラルド神父 Carmelo Pappalardo)。

そもそも1901年にフランシスコ修道会聖地管理局が設立される以前からフランシスコ修道会の活動は活発に行われていた。パレスチナ地域とカトリック教会・フランシスコ修道会の関係は古く、中近東にフランシスコ修道会が設立された1218年である。1226年には最初の修道院をエルサレムやアッコに建設した。1342年、フランシスコ修道会はエルサレムに管理局を設置し、最後の晩餐の間と同時に聖墳墓教会、ベツレヘムの生誕教会の管理を担う。彼らの主な任務は教会堂管理と巡礼者の保護で

あった。

一時はオスマン帝国から追放されたが、再びパレスチナの地に戻ると19世紀までに、新約聖書と関係の深い聖地や聖跡を管理下に置き、記念教会を建てた。19世紀になると、パレスチナ地域にある教会堂の大改修工事が始まり、各地にある教会堂遺跡が調査され、その上に新たな教会堂や修道院の建設ラッシュが始まる。1901年にフランシスコ修道会聖地保存会が誕生すると、トランスヨルダン地域でイエスや福音書と関わりの深い聖跡を積極的に調査、保存する活動を始めた。

このように新約聖書に関連のある聖地(Sanctuary)を管理下に置き、そこを整備し新たな教会堂建設を行う際に、遺構の調査などを修道士たち自身で行っていた。この活動こそがフランシスコ修道会の発掘活動の原点である。つまり20世紀以降にフランシスコ修道会聖書研究所(以下S B

F)によって調査されている教会堂でも、現在の調査方法からすれば不十分かもしれないが、すでに13世紀以降に調査済みのものもある。彼らの発掘調査の目的は「初期キリスト教教会堂と新約聖書に記されている聖地を同定する」であるため、調査地は主に新約聖書に関連する場所で占められた。フランシスコ修道会で本格的な発掘調査が始まったのは、19世紀末ベツレヘムでの床モザイク発見からである。特に1924年S B Fが誕生したあと、コルボ神父、バガッティ神父を中心にパレスチナに散在する教会堂遺構の徹底調査を行った。その調査件数は、当地域で報告されている約400ある教会堂遺構のうち20パーセント以上を占める数である。これは他のキリスト教宗派と比類にならない調査件数である。(つづく)

(慶應義塾大学後期博士課程)



最近のイスラエル考古学的话题から

日々進められているイスラエルでの発掘すべてをフォローすることはできませんが、インターネットを通して収集できる情報は以前と比べると飛躍的に増加しています。考古学ニュースサイトやメーリングリストの議論の中には学界だけでなく広く一般の関心をひいている話題も少なくありません。話題の選択基準の偏りは悪しからずご了承いただくとして、歴史との関わりの強いものを中心に最近の話題をお伝えしていこうと思います。

「ライオンの女王」?

2008年のベトシェメシュ発掘で、女性の像が刻まれた土製の飾り板(plaque)が見つかった。その姿は髪型は女性だが、体は男性として表現され、

両手に蓮と思われる花をもっている(右図参照)。発掘を指揮するZ・レーダーマンとS・ブニモヴィッツは、ベトシェメシュを支配していた女王を描いたものではないかとの解釈を提案している。海岸平野から山地のエルサレムへ上っていく道の途上に位置するベトシェメシュは初期鉄器時代にはイスラエルペリシテの境界地域に位置する町として小さからぬ役割をもっていたこ



とが聖書の物語に伝えられており（サムエル記上6章）、発掘調査もそうした境界の町であったことを示している。しかし、問題の飾り板はペリシテ到来以前の後期青銅器時代の文脈に見られる激しい破壊跡の前の時代に属す土層から発見された。破壊は予めの撤退もできないほどの急襲によるものであったらしく、同じ土層にはエジプト風のものを含め、多くの遺物が残されていたといい、今後さらに興味深い発見があることも予想される。

破壊の激しさはその町の重要性を示しているとも言える。後期青銅器時代にベトシェメシュが重要な町であったことは十分に想定されることだが、この時代のパレスティナの状況を伝えるアマルナ文書にベトシェメシュは言及されていない。当時は別の名で呼ばれていたらしい。一方、同時代のアマルナ文書には NIN.UR.MAH.MES（「獅子たちの貴婦人」）を自称する女性の支配者が送った書簡があるが（EA 273-274）、その支配する町がどこなのかわかっていない。町の同定については諸説あるが、その書簡はゲゼル、エルサレムなどが関わった「アピル／ハビル」の争乱について書かれていることから、地域的に見てまだ同定されていないベトシェメシュが有力視されている。今回の飾り板はこの仮説の傍証になるとというのが発掘者の主張である。【www.aftau.org/site/News2?page=NewsArticle&id=9319】

イスラエルの考古学において文書と考古学の関係といえば聖書にまつわる議論が主であった。その際には聖書の歴史的な性格から慎重な態度が要求されてきたが、アマルナ文書という一次資料が伝える歴史状況と考古学の成果をすり合わせる試みも注目を集めている（N. Na'aman, *Biblical Archaeology Review* 35/1, 2009, 52ff.）。

「足跡」の遺跡

シケムを中心とする「マナセ台地」を主要なフィールドにしているハイファ大学のアダム・ゼルタルによると、ヨルダン溪谷からシケムにかけて、平面図で見ると全体が足跡の形をしている遺跡が五つ見

つかっており、この五つのうちで一番南にあり、ヨルダン川に最も近い遺跡が聖書のギルガルと同定されるという（ヨシュア記4章）。

ゼルタルによるギルガル同定の試みは八〇年代から続けられており、今は亡き A・ケンピンスキーとの激論が思い出されるが、今回の主張が考古学サイトだけでなくイスラエルのメディアでも広く伝えられたのは、そのユニークな言語的関連づけのためとっていいだろう。ユダヤ教で最も重視されている祭りは「過越祭」「七週の祭」「仮庵の祭」の三つだが、この三大祭をまとめて「シュロシャー・レガリーム」（直訳すると「三つの足」）といい、「足」に当る語は「祭り」「祝祭」の意味でも使われている。また、この三つの祭りはイスラエルの男子が「一年に三度、主なる神の御前に詣でなければならない」（出エジプト記23章17節）とされた三大巡礼祭である。ヘブライ語で「巡礼」のことは「アリヤー・ラ・レゲル」というが、直訳すると「足への上り」で、やはり「足」という語が用いられている。

この「足」は元々「足跡」ギルガルを意味していたというのがゼルタルの主張である。「足」は土地所有権を象徴していると考えられ、ヨルダン川を渡ってやって来たイスラエル部族がヨルダン西岸での土地獲得を記念する場所としてギルガルを祀り、その記念の巡礼を行っていた記憶が「アリヤー・ラ・レゲル」という言葉に残っているというのである。宗教の中心がエルサレムに移った後、巡礼は「足」ではなく、エルサレムへの巡礼を意味するようになったが、「足」は言葉の中に残った。【www.sciencedaily.com/releases/2009/04/090406102600.htm】

この説は非常にユニークな解釈だが、ギルガル同定の決定的な根拠にはもちろんなり得ない。しかし、同じような「足跡」型の遺跡が少なくとも五つ、初期イスラエルの最初の中心地と目されているシケムに向かって続いていることから、その「足跡」型の遺跡を順々に巡り、最後にギルガルに至る巡礼行の存在を想像してみたいくなる。また、ギルガルは地名ではあるけれども、もともとは普通名詞であった

らしく、さらには聖書でギルガルと呼ばれている場所は複数ある。この話題は言葉遊びにとどまらない深さと広がりをもっているようだ。長年この問題に拘り続ける学者がいるのも当然のことなのかもしれない。(宮崎修二)

////////////////////

□ 第 11 回イスラエル考古学研究会 □

2009 年 10 月 31 日 (土) 14:00 ~

於: 慶應大学三田キャンパス西校舎 523B 教室

◇ 発表 ◇

間舎裕生 14:10 ~ 14:50

「2009 年度エン・ゲヴ遺跡発掘調査成果報告」

小野塚拓造 14:50 ~ 15:30

「テル・レヘシュ遺跡第 5 次発掘調査報告」

河合雄介 15:30 ~ 16:10

「エン・ゲヴ遺跡保存計画のための現地調査結果と初期設計案」

2008 年度会計報告

(2008 年 4 月 1 日 ~ 2009 年 3 月 31 日)

1. 収 支

[収 入]

会員会費	91,000
寄付金	5,020
利 子	104
小 計	¥96,124

●●● 目 次 ●●●

エン・ゲヴ発掘 報告書刊行	1
M・ピッチリッロ氏のこと (1)	岡田真弓 2
最近のイスラエル考古学の話題から	宮崎修二 4
お知らせ	6
編集後記	6

[支 出]

通信費	19,340
消耗品費	900
研究会開催費	3,910
小 計	¥24,150

2. 決 算

収 入	96,124
支 出	24,150
昨年度からの繰越	159,392
残高 (来年度に繰越)	¥231,366

編集後記

○平行線が交わることもあれば、二乗してマイナスになる数字もあるように、数学は現実ともっともかけ離れた学問だと言える。実学でない非現実な学問は一見無意味なものに思える。しかしそんな数学があらゆる分野における科学性の根拠を担っている。遠回りとは無意味には壮大な価値がある。

○なぜイスラエルで発掘しているのか。時間的にも空間的にも、どれだけ遠くへ行けるかは、より身近なものを見ることと、未来を知ることにつながっているはずだ。自問自答。(Y.T)

○毎度のことながら遅くなって申し訳ございません。イスラエル考古学のニュースはここで取りあげるつもりになって追っかけていると「あれもこれも」と思ってしまいます。選ぶのに手間取って遅れたわけではありませんが、できるだけ関心の高そうなものをお送りしたいと思います。(Mi.)

イスラエル考古学研究会 ニュースレター No. 8

2009 年 10 月 21 日

編 集: 巽 善信 宮崎 修二

発 行: イスラエル考古学研究会

〒 632-8510

奈良県天理市杣之内町 1050 番地

天理大学文学部 考古学・民俗学共同研究室内

e-mail: israelkai@yahoo.co.jp

郵便振替口座

00960-3-79256 イスラエル考古学研究会